六甲山武庫川水系

辻　憲男（文学部教授）

万葉集の作者不明の歌に、

しなが鳥猪名野（ゐなの）を来れば有間山夕霧立ちぬ宿りはなくて

武庫川の水尾（みを）を早みか赤駒の足（あ）掻くたぎちに濡れにけるかも

というのがある。今の伊丹市あたりから六甲の山なみを望んだ感懐である。武庫川の渡河点は、上流の宝塚寄りであったらしい（西国街道の“ヒゲの渡し”は今の国道 171号線甲武橋の北）。宝塚から峡谷に分け入り、支流・太多田川をさかのぼると蓬莱峡である。万葉びともこの峠道から有馬へかよった。「風土記」の逸文に「塩の湯」とある。海から遠いのに塩辛いのが不思議がられた。

ところで、この峡谷を舞台にした松本清張の推理小説が、1969年のベストセラーになった。男女が岡山でおち合い、尾道、福山、大阪、伊丹、有馬と移動する。男は考古学者である。『内海の輪』という題名は、海道ループと、発見されたガラス釧（くしろ＝腕輪）と、事件解決の「失われた欠片（ミッシングリンク）」とをかけている。いかにも清張らしい、愛憎劇の無惨な結末。

同じ年、当代のもう一人の人気作家・水上勉も「名塩川」を書いた。隣村の名塩（なじお）に紙漉きを伝えた男とその妻子の悲話である。能の「花筐（はながたみ）」を下敷きにした。こちらは王子に去られた女・照日ノ前が、狂乱の末に、形見の花かごにより愛情を取り戻すという名曲。古典はどこか心やさしい。

奇岩がそそり立つ蓬莱峡。西宮市山口町。